空阿弥陀仏明遍の研究（Ⅲ）

――中世高野山における結衆とその背景――

青木　淳

中世の高野山には、めまぐるしい変動を見せる社会構造からの「はみだし」た人々の群像があった。[1] 保元の乱以降源平の争乱や政争に敗れた人々、また都市を中心として不安定な世相に厭世観念をつのらせた遁世者たちが相次いでこの山に籠り、しだいに独自の宗教的共同体を形成していった。

この共同体における結衆の構造は、前稿[2]までに述べたように血族的な関係や法縁的な関係によるものが中心となっているが、さらにそうした人々の信仰生活の場は明遍や重源といった勧進ひじりたちの組織の中に吸収されていく。共同体の構成員たちはすでに公家として、あるいは新興の権力集団である武家としての社会的ステータスを得ていたものが多く、[3] たとえば重源が創設した専修往生院（新別所）の結衆（蓮社友）をみると藤原成頼（元、参議）、平維盛（平重盛息）、斎藤時頼（滝口入道・維盛の近臣）、熊谷直実（鎌倉幕府御家人）らの名が見え、[4] また明遍の蓮華三昧院を中心としたグループには静遍（平頼盛息）、[5] 貞暁（源頼朝息）らのほか平治の乱に敗れ自刃した父藤原通憲（信西入道）の郎党などが結衆している。[6] 彼らの多くは基本的に僧綱に列するなど高野山のタテなどの勧進の機構と直接的に関係をもつことは少なく、逆に造寺や架橋や葬送に関わる三昧僧として職能的なひじりのネットワークを再び都市に展開する役割を果たした。「世事を離れ、吏務に預らざる隠遁者」という『非事吏事歴』の説明は、まさに高野山におけるひじり集団のすがたを象徴している。明遍の登場する平安時代後期になると、それまで山内の経済活動の基盤となっていた寺領荘園はしだいにその属性を失い、それに代わる経済活動の担い手として明遍や重源を中心とするひじりのネットワークが頭角を現すようになる。[7]

明遍集団はとくに「非事吏類別」に「諸国の路次に尸を晒す無縁の霊骨を給ひ、是れを高野の霊地に納め、菩提の資糧に擬す。其骨を運びける料に負口を造りて諸州に偏歴す」と

見えるように「回国と納骨」という方法でその勧進活動を展開した。そして各地を遊行するひじりたちの往来は、高野山に政治的なものから思想や俗習的な部分に関わるものまで、さまざまな文化情報の集積を生み、そうした情報は『平家物語』や『一言放談』のような文学や信仰伝承のなかに反映され、[8]彼らのひじりとしての宗教活動や職能的勧進僧としての経済活動に大きな影響を及ぼしたものと考えられる。

中世高野山における共同体はその宗教性や職掌という部分で分化するが、基本的にそのプランナーである明遍や重源は高野山における地縁的な関係から結衆を組織したわけではなく、東大寺在住時代に関係をもった公家や御家人を、また彼らの血縁や姻戚関係にある人物を庇護者として共同体を構成したことから、その実態はほぼ同時期に行なわれた東大寺再興時の文化圏と極めて似通った様相を呈している。このことは、とくに中世の高野山における仏師の快慶（ならびにその工房）による造像活動とその背景についての検討をすすめる中でより明確な実態が再現されよう。[9]

周知のように快慶は運慶と並び称される鎌倉時代を代表する仏師で、重源が再興大勧進をつとめた時期の東大寺の南大門金剛力士像、同八幡宮僧形八幡神像、俊乗堂阿弥陀如来立像などの作者として知られる。快慶の高野山における足跡を在銘像からみていくと正治二年（一二〇〇）後鳥羽上皇の御願で建立された孔雀堂の孔雀明王像、ほぼ同時期に造立されたと目される重源の新別所経蔵旧蔵と伝える四天王立像、幕府御家人の佐々木高綱が檀越となって建立された明遍の蓮華三昧院の阿弥陀如来立像（現、遍照光院所蔵）、承久三年（一二二一）後鳥羽上皇の息道助法親王が開創した光台院の阿弥陀三尊像、また快慶の工房作とみられるものとして源頼朝の庶子貞暁が貞応二年（一二二三）建立した五坊寂静院の阿弥陀三尊像、やはり貞暁関係の作例と目される奥の院護摩堂の不動明王坐像など[10]をあげることができる。教団や宗教的な共同体と仏師がこれほどまでに密接な関係を有する事例は歴史的にも極めて少なく、さらに造像の檀越となった人々は、ほぼ東大寺再興時の外護者と共通している。快慶による造像活動がこうした重源や明遍を中心とした共同体のあいだで行なわれた背景には、仏師や三昧僧のような宗教活動における必要性という一面をもちながら、封建的社会秩序の中で不安定な位置にある職能集団を包括的に統合していく役割を、明遍や重源らのひじり集団が果たしていたことを物語る。

また『法然上人行状絵図』[11]の明遍伝の中に、法然の遺骨を一期のあいだ明遍が頸に掛け、その滅後遺骨は五坊寂静院の貞暁に伝授されたとする記事がみえる。貞暁の師は『方丈記』[12]の中で、平安京に散乱する死体の額に阿字を書き鎮送供養をしたことで知られる仁和寺の隆暁という人物で、明遍、

隆暁、貞暁のいずれもが名門の出身者であることの深層には、葬送に関わる三昧ひじりという職能的コンプレックスを、貴種を頭目に据えることによりステータスに変容させていこうとする中世の社会思潮的な仕掛けの一端を見ることができる。さらに『法然上人行状絵図』の記事は、明遍から貞暁への骨聖としての蓮華谷聖の継承と、その宗教的系譜を法然のそれに結びつけようとする志向があり、中世精神文化史における思想構造的なメタファーと捉えることができよう。(13)

1　中世高野山における文化圏の特色については五来重『増補高野聖』(昭和五十年六月)が極めて幅広い視野から総合的な論究を試みた名著としてあげられよう。併せて小稿では井上光貞『日本浄土教成立史の研究』(昭和三十一年九月)、伊藤唯真『浄土宗の成立と展開』(昭和五十六年五月)参照。

2　拙稿「空阿弥陀仏明遍の研究(Ⅰ)—特に仏師快慶との関係をめぐって—」(『印仏研』40-2　平成四年三月)、同「空阿弥陀仏明遍の研究(Ⅱ)—『明義進行集』の記事よりみた信仰者の血族的結衆の一考察—」(『印仏研』41-2　平成五年三月)

3　重源の蓮社友に関する基礎資料としては『高野春秋』元暦元年之条、『紀伊続風土記』五等を整理した井上氏前掲書(p・305—p・406)参照。

4　建久五年(一一九四)頃、快慶によって造立された京都・遣迎院阿弥陀如来立像の像内納入品の結縁交名には平経盛、忠度、重盛、宗盛ら十八名の平家一門のほか、源行家、義仲、義経らの追善結縁が確認されており、中世高野山にみられる人々のネットワークと極めて近い文化圏とみてよかろう。(実査)

5　静遍(1166-1224)は前稿で取り上げた浄土宗系の僧伝『明義進行集』にも登場する人物で、東大寺の『東南院三論法脉』によると明遍の弟子にあたる。晩年高野山往生院に住したが、その結衆の基盤は明遍集団とほぼ同一のものとみてよかろう。

6　通憲(1106-1159)は後白河法皇の近臣で博識と権謀で知られた人物だが、平治の乱に敗れ自刃する。そのおり同行していた四名の従者は、主君の死を前にしてみずからの活路を剃髪・出家の後、それぞれ西光・西景・西清・西実と名のり後生安穏の場を高野山に求めている(『平治物語』)。

7　和多昭夫「高野山教団の経済史」(『密教学研究』創刊号　昭和四年二月)参照。承久元年(一二一九)二月の「明遍宛て覚海書状」(『大日本古文書』家わけ第一、高野山文書第二、宝簡集四九)は旧来よりの吉野・高野間の寺領争論の仲裁を明遍に依頼したもので、荘園に頼らず勧進による独自の経済活動を展開した明遍等のひじり集団の中立性を物語る。

8　柳田国男「有王と俊寛僧都」(『物語と語り物』所収)、家永三郎「浄土教芸術としての平家物語」(『国文学解釈と鑑賞』一六—十　昭和二十六年十月)、註2論文の中で言及あり。

9　大阪・八葉蓮華寺阿弥陀如来立像や奈良・安倍文殊院文殊菩薩像など明遍に関係の深い快慶作例が京都から高野山へのいわゆる東高野街道沿いに点在していることも、今後の明遍ならびに高野聖の文化圏を考察する上で重要な視点といえよう。

10　『紀伊続風土記』にみえる寛喜元年(1229)貞暁が奥の院不動堂に寄進したものか。京都・醍醐寺三宝院不動明王坐像に通じる作風は玉眼、玉歯を用いるなど快慶工房の特色を見せる。

11　巻十六(『日本絵巻物全集』昭和三十六年五月　p・81)

12　新日本古典文学大系本による(p・13)。

13　法然の初期浄土宗教団による造像活動が、明遍や重源のグループと同様に快慶工房で行なわれたことは、中世の宗教的文化圏の考察する上で今後新たな視点となるであろう。拙稿「西山證空上人における造像の研究(Ⅰ)—大念寺阿弥陀如来立像像内納入品を中心に—」(『西山学会年報』第2号　平成四年六月)参照。(一九九三年度(財)トヨタ財団・助成研究)

〈キーワード〉ひじりネットワーク、共同体、貞暁、快慶、寺領荘園の解体

(国立総合研究大学院大学院生)